



グローバルの現場から

Discovery beyond borders

神田外語大学 神田外語キャリアカレッジ
代表 仲 栄司

第 1 回

語学ってどこまで必要？

グローバル化が進むなか、どんな業種・職種・現場でも「グローバル」な視点が求められるようになっていきます。とはいえ、「グローバルで活躍する」とはいったいどのようなことをいうのでしょうか。英語が話せること？ 異文化を理解すること？ もちろん、英語や他の外国語が話せるに越したことはありませんが、グローバルで活躍していくために必要なことは、それだけではありません。

本連載では、ますますグローバル化していく世界で活躍できる組織・人材となるために必要な要素を、私の現場での経験を交えながらお伝えしていきます。

念願の欧州部に配属されたものの……

「君は英語とドイツ語とどっちができる？」

これは入社面接のときに聞かれた質問です。私は大学でドイツ語を専攻したもののヒアリングもスピーキングもいま一つでした。英語も同じようなレベルで、どちらもたいしたことなかったのですが、「どちらか」という質問でしたので、「ドイツ語です」と答えたところ、欧州ビジネスシステム部に配属となりました。

入社後は、希望どおり海外関係の仕事に就いたのですが、英語がそれほどできない私が海外の仕事に携わっていくことに若干の不安がありました。毎日の仕事は、日本の本社でイギリスから送られてくる納期の問い合わせやオーダー処理に関する英文メールに対して返事を書いたり、こちらから質問したりすることでした。イギリスからは納期を急かす内容が多く、きつい

表現の英語が飛び交っていました。

いつしか英語への抵抗感が薄れる

入社2年目に入り、私に出張のチャンスが訪れました。ドイツのデュッセルドルフにいる先輩社員を徹底的にサポートしてこい、という趣旨の出張でした。期間は2カ月と長期にわたりました。出張先が英語の母国語圏ではなかったのと、先輩社員が私に結構仕事を任せてくれたので、英語に対する抵抗感がなくなりはじめました。また、毎日、ドイツ人と英語で会話するので、だんだん言葉にも慣れてきて、コミュニケーションもそれなりにできるようになりました。

そのなかで、これまでメールでのやりとりだけだった人とも会う機会がありました。シルビアというイギリス人の女性は、メールでは「この人、ちょっとアタリがキツいな」と感じていたのですが、会うなり「How are you? Thank you for your support and cooperation.」と笑顔で握手してくれて、拍子抜けしました。

そうした経験を経て、出張後は英語への抵抗感がかなりなくなっていることに驚きましたし、メールにジョークを入れる余裕すら生まれました。不思議なものです。何か剥がれ落ちた気がしました。「苦手だ」と感じていた人たちとコミュニケーションがとれたことで自信がついたのでしょう。相手の顔や人柄がわかると安心感も生まれ、英語の文章にも気持ちが入っていました。

信頼関係が自信へ

3年目もまたデュッセルドルフに長期出張しました。その時、一緒に仕事をしたドイツ人のハーターとは、ビジネスのことからプライベートのことまで何でも話をしました。意見のぶつかり合いもありましたが、ビジネス立ち上げという共通の目標があったことでいつも前向きに議論ができました。そして、英語漬けの毎日が、知らず知らずのうちにさらに英語への抵抗感を薄くしてくれました。

当時、私のTOEICのスコアは645点で、会社の規定では「単独渡航不可」だったのですが、人事部はそんなことはお構いなし。海外営業グループなのだから英語はできてあたり前、できなければ現地で何とかしてこいと、入社5年目にドイツ出向の辞令が出ました。

出向してから英語への抵抗感はほぼなくなりましたが、聞き取れないことはよくありました。曖昧にふんふんと頷いていると、話はどんどん進んでしまします。そういう時は、話をストップさせて聞き直す勇気が必要です。

私の場合、聞き直しても相手の英語がわからないことがあるので、「今言ったことはこういうことか」と白板にポイントを箇条書きするようにしました。そのようにして相手の言っている内容を自分の言葉で理解することを心がけたのです。また、ビジネスでは数字を聞き間違えると大変なことになるので、「フィフティ」と言われた時には、「ファイブゼロか」と確認するようにしました。

コミュニケーションを意識

私は今でも「英語ができる」と胸を張れるわけではありませんが、英語でコミュニケーションがとれることを楽しく感じます。海外の人と仕事を進める際、語

今月の ワンフレーズ



Is this what you just said?

今言われたのはこういう意味ですか？

不安な時、確認したい時に使ってみましょう。

学は必要かと問われれば、「もちろん必要です」と答えます。しかし、大切なことは、相手としっかりコミュニケーションをとり、信頼関係を築くことだと思います。

入社した当時は英語にまったく自信がありませんでしたが、出張を繰り返すことで次第に抵抗感は薄れていきました。振り返ると、シルビアの例のように、メールや電話だけでなく、直接会って相手の顔を見る(相手を知る)とコミュニケーションは円滑に進みます。また、ハーターの例のように、1対1で向き合い、自分をさらけ出すと信頼関係が生まれます。

グローバルに出ていく時には、相手の価値観を尊重し、自分の意見を発信するコミュニケーション力が大切だと感じます。通訳者ではないのですから、語学が完璧である必要はありません。そこにこだわるのではなく、コミュニケーションのとり方にこだわるのが大切です。

必要なのは、英語ではなく、「相手の考え方を尊重し、コミュニケーションをとる」姿勢です。語学はあくまで手段。私たちはコミュニケーションをとるために、人とつながるために英語を必要とします。グローバル化は語学の問題ではなく、考え方の問題だと、私は思っています。 ■



仲 栄司
Naka Eiji

大学でドイツ語を学び、1982年、NECに入社。退職まで海外事業に携わり、ドイツ、イタリア、フィリピン、シンガポールに駐在。NEC退職後、国立研究開発法人NEDOにて日本企業の海外企業とのイノベーションプロジェクトの支援に取組み、2021年4月に神田外語キャリアカレッジへ入社。現在は、代表として顧客企業の業務・ビジネス推進と人材の活性化を目指して活動。